〈近世女性史資料(7)〉

明孝慈列女図會（2）

——書誌・翻刻——

黄　色　瑞　華*1
若　林　俊　英*2

＊1　城西大学教授・主任研究員
＊2　城西大学女子短期大学部助教授

凡例

1　『明孝慈列女図會』の忠実な翻刻を旨とする。

2　使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるようにする。

3　漢字ルビ、読点もすべて原本のままとする。

4　紙幅の都合上、本文の行移りのみ原本どおりとし、丁移り・表裏の別は、」一オ、』一ウを以てそれを示す。

5　挿絵は省略する。ただし、当該箇所には、〈挿絵〉を明示する。

6　奥付は、「巻之上」（本誌第六号所収）の翻刻に付した「書誌」と重複するので省略する。

明孝慈列女図會巻之下

㊀漢の馬皇后ハ。明帝の御后なり。天性才徳すぐれさせ給ひて。周易春秋楚辞周
官等の学に通じ給ひ。御おこないひひとつとして。道にかなハずといふ事なし。中にも物ねた
ミの御心ましまさずして。わうじのおほく生れさせ給はぬ事をのミ。くやませ給ひて。才かしこく
かたちうるハしき女あれば。わが御かたよりみかどにたてまつり給ひ。もしそれを御てうあいあれバ。かぎ
りなくよろこび給ひて。其女を猶々したしミめぐミ給ひける。后の御位ハ。たつとき事上なしと
申せども。いさゝかおごり給ふことましまさず。常にあやにしきのあざやかなるきぬハき給ハず。ふとき
わりぎぬのたぐひ。あら〳〵しきゝぬをのミ着玉へり。御子も帝と成たまひて後。御母かたの一門に。大
國をさづけ。まつりごとをあつからしめ。たつとくなしまゐらせんと。勅定有けれども。かたく辞退し
給ひ仰けるハ。むかしより后がたの親類時にあひぬれバ。かならずぶんをわすれおごり長じて。天下の
わざハひと成事。そのためしすくなからず。其上今わが親類。それ〳〵のぶんに應じたる位にそなハり。

禄を給ハりてゐる事。時にあひたるさいはひなるに。この上
に何の功もあらずして大國を給ハり。天下
の政をとりおこなハん事。たとへバふたゝびミのる木の其
根必かるゝがごとしとて。つゐにわが御親類を。
たつとくなし給ハざりけり。かたじけなくも天子の御母とし
て。宮中にいとくり。はたをる所をこしらへ
させ給ひて。御なぐさミにハ此ところへ行て。其わざを見て
御たのしミとしたまひけるとなん　一一オ

〈挿絵〉　一ウ・二オ

㊁曹皇后ハ。宋の仁宗皇帝の御后なり
御うまれつき。慈悲ふかく倹約を守給ひて　〈挿絵〉上部
貴き御身にても。民の業のくろうをおぼしめし。わ
すれ給ハずして。禁中の御庭に田をうへさせ給ひ
て。まのあたり。耕作のつとめやすからぬさまを見
たまひかたしけなくも。ミづからかいこをかひ給ひて
徒に月日を送り給ふことなし。ある夜俄に謀叛人
有て。御寝殿迄乱入しに。ミかどおもてへ出んと
し給ふを。后とゝめ給ひて。いだし給ハず。所々の
戸ざしをかたく閉給ひて。帝をまもり居たまひ
けるが。さふらふ人々に仰けるハ。かやうの時節にハ謀反
人かならず。火をつくる物なるぞ。いそぎ水をおほく
くませて。御殿のめぐりにおかせよ。こよひ帝に
つかへたてまつりて。忠勤おこたらざるものハ。后
ミづからその人のかミのけを。すこしづゝ切てしるし　二ウ
とせんとのたまひければ。人々命をおしまず。帝
を守護したてまつりしに。あんのごとく謀反人。火
をかけけれども。たくハへ待居たる水にて。なんなく
けしてことゆへなかりけり。さてあしたになりて。
かみをきられたる人をしるしにて。めし
出し。ミな〳〵ほうびを給ハり侍りける。其　〈挿絵〉上部
のちみかど夜中ににハかにおもくやミた
まひ。崩御したまひしに。きさき此事を
ふかくしのびたまひて。人にしらせたまハず。
いそぎ門々のじやうをおろさせ。かぎどもを
とりよせたまひ。御世つぎの太子をよび
いれたまひて。さてあくる日になりて。崩
御のことを人々にしらせ給へり。かゝるにハか
なるおりふし変あらんことを。おもんバかり
給ひし。智恵たぐひまれなる御事どもなり　三オ

㊂昭睿順聖皇后ハ。
元の世祖の御后なり。勤倹　〈挿絵〉下部
の御徳まし〳〵て。ミづから苧
うえいとくりて布とし給
ひ。わたをのべてつむぎとし

たもふに。いとすぢほそく
そろひて。あざやかなること。
綾綺のあやにことならず。常に
此つむぎの衣をきたまひ
て。うるハしき絹をきた
まハず。よろづの事これになぞらへて。おごりをはぶきミち
をつゝしミたまへば。ばん
ミん御徳に化し侍りぬ。この時のミかどハ。だつたんごくよ
りいでたまひて。大唐をう
ちほろぼし。大唐のミかどゝなりたまひたれば。もとよりき
さきもだつたんごくの御
うまれなり。えびすの國にうまれ玉へども。御こゝろざしハ。
聖人のミちにかなハせたまへバ。
いづれの國に生れ。いかなる人なりとも。こゝろざしだに有
バ。などか聖賢の道に。かなひ侍らざらんや　」三ウ
㊃班婕妤ハ。漢の成帝の宮女なり。御寵愛た
ぐひなかりけれ共。我一人寵をもつハらにせんことを
ねがハずして。行ひたゞしくかたちすぐれたる女
あれバ。我方より帝にすゝめたてまつり給ひけ
る。あるとき趙飛燕といふ女の兄弟。御寵愛
有ければ。此女ハりんきふかく悪逆なる人にて。班
婕妤をねたミ。とがにあハせんとたくミいつハり
て。帝に申あげゝるハ。班婕妤君の我を。御寵〈挿絵〉上部
愛あることをねたミ。おそろしくも君をのろひ
侍ると申あげゝれば。帝おどろきたまひ。班婕
妤をめし。せんぎしたまふに。つゝしんでこたへ申され
けるハ。こハ倫言ともおぼへ侍らぬものかな。死生
命ありと聖人のをしへおきたまひたれば。悪を
つくりいかほどのろい侍る共。天命いたらずハ。死す
まじきもの也。其上たゞしきことをいのり申すさへ。　」四オ
天道ハとをきものにて。すミやかにかなふことハ。まれなる
ものなれバ。まして主君をのろい申すハ。
不忠の大悪なれば。神明いかでか。よこしまなる事をかなへ
たまハんやと。申上ければ。ミかど
此返答道理にかなひたる事を。えいかんまし〳〵てかへりて。
百斤の金を。ほうびし給ひけるとなん
㊄晋の恵公の太子。秦の國に人質に居玉へり。秦の君太子の心
を我國にとゞめさせまゐらせん
為に。御娘懐嬴をめあハしたまひぬ。有時太子つまの懐
嬴にの玉ひけるハ。われ久しく他國のす
まゐをなし。古郷をなつかしく思ひ侍る也。いかにもして忍
び出。本國へ逃行んと思ふ也。としごろの
なさけたがハずハ。我にしたがひともに。本國へゆき玉ひな
んやと仰けれバ。懐嬴こたへ給ひけるハ。

御身ハ晋の國の太子にて此國にくるしミゐたまへバ。古郷を
したひ玉ふハことハり也。われもともなひゆ
きたく思ひ侍れども。我親のわれを太子につかへしめたまふ
ハ。御身を此國に心をとめさせまいらせ
て。のがしやるまじきためなれば。をつとの命なればとて。
ともに逃行バ。ふ孝の罪のがれがたし。又孝
行のためとて。逃行たまふことを。親につげ侍らバ。ふうふ
と成し義理にかなハず。これふたつ
ながら道にかなハざれバ。所詮たゞ御身ハのぞミのごとく。
ほんごくへにげゆきたまふべし。
われこのことを人にもらすべからず。またをつとのめいにた
がふとも。ふ孝のつミもだし
がたければ。わが身ハとゞまりてしたがひ行べからずとて。
つゐに太子一人を本國へおとし行
しめ玉へり。孝もたち義もかけざる事。ありがたき御こゝろ
ざしならずや

『四ウ

〈挿絵〉

五オ

㈥楚の昭王の夫人に。蔡
姫越姫といふ二人あり。王
御狩に出玉ふ時。此二人の宮
女を。御車にのせゆき給ひ。
御遊の御たのしミのあまり。さ
いきといふ女に仰けるハ。今生
にて同じくたのしむがごとく。
後の世までもかくあらまほ
しく思ひ侍る也。なんぢハ
いかゞ思ふやとの給ひけれ
バ。蔡姫申けるハ。いやしき身
のかたじけなき御めぐミにあ
づかりて。御そばちかくつかへ奉り
侍れバ。かずならぬ身も。後の世かけ
てもろともにとこそ。ねがひ侍るなり
と申上けれバ。王なのめならすよろこび給ひて。
さて越姫ハいかゞおもふやと仰有ければ。越姫こたへて申
上けるハ。御遊にしたがひ奉りて。心のたのしミかぎりなし。
さ

『五ウ

〈挿絵〉下部

〈挿絵〉下部

りながらたのしミハひさしうすへからず。遊宴をこのミ。國
の政に
おこたり給ふハ。君王の道にあらず。しかるに此たのしミに
心をうつし
給ひて。後の世かけて女にちぎり玉ふこと心得がたくおぼへ
侍れバ。
御うけ申がたき事なりとぞ申上ける。王ことハりに服し給ひ
て。もつ

ともなりと仰けれとも。猶蔡姫をぞ御てうあいまさり侍りける。其後
王おもきやまひにそミ給ひ。すでにあやうく見へさせたまふ時。はかせをめしうらなハ
せたまひければ。はかせかんがへ申あげゝるハ。此御やまひきハめて御大事なり。さりながら國の
大臣にまつりかへ侍らバ。王の御いのちたすからせ給ハんと奏聞しけるに。王のたまひけるハ。國
の大臣ハわが手足にことならざれば。これにかへてわが命をのばハらん事。詮なしとて。まつり
かへさせ給ハざりけるに。おりしも越姫すゝミ出て申上けるハ。ねかハくハわがいのちにまつり
かえさせ給ハれかし。むかし御遊の折ふし。我命を君もろともと。御うけ申あけざりしハ。
道にかなハせたまハぬ勅綻なればなり。いま國の大臣をおしミ給ふ御こゝろざしハ。御徳あ　」六オ
〈挿絵〉　六ウ・七オ
きらかなり。かくあきらかなる。御徳ましますにいたりてハ。万民こと〴〵く御いのちに。かハらん
事をねがひ侍るべし。いはんやかずならぬわが身をや。いそぎ御身がハりにたちまいらせんと
申上ければ。王しきりにとゞめ玉へ共。つゐにじがいしてぞ
死しにける。しかれ共王のやまひ
もつゐにいへたまハず。ほどなく薨じたまひけるに。御子あ
またましく〳〵て。いづれを世つぎの御
位にすへたてまつらんと。せんぎまち〳〵なりける所に。諸臣の心一同に母まことあるものは。
其子かならず仁有とて。越姫腹の御子を位にたて。楚の惠王と申たてまつり。めでた
くさかへたまひけるとなむ
㊐馮昭儀ハ漢の元帝の宮女なり。ある時帝の飼置玉へる熊。圏をやぶりてはしり出。御殿へ
のぼらんとす。さふらふ人々あハてさハぎて。ことゞくにげたりしに。馮昭儀一人すこしもさハがず。熊に
向て立ゐたりけれバ。熊もしバしとゞまりゐて。あなたこなた見まハしてゐける所を。人々出合て。遂
に熊をうちころしぬ。帝馮昭儀にとひ給ひけるハ。男女にかぎらず。いづれもおどろきさハぎて
にげけるに。なんぢ一人女の身として。おそれず熊にむかひてたちたる事。きどくなる心ばせ也
と仰ければ。馮昭儀こたへたてまつりて申上けるハ。われもとより聞および侍りしハ。いかな
るたけきけだものも。人をばおそれて。ひとまづしりぞくとうけたまハり侍るゆへ。もしも

ミかどの御まちへちかくきたらん事をおもひ。熊にむかひて
たち侍りぬと申ければ。かぎり　　『七ウ
なくえいかんまし〳〵てそれよりのち。馮昭儀をたつとミお
もんじ給ひて。つゐに中山の大后とよばれたまひけるとなん
八周の主父が妻。をつとたびへ行たる留主の内に。となりの夫
と密通す。わがをつと帰りなばあらハれなんとおもひ。
まをとこといひあハせ。とかくわがをつとを。殺さん
と思ふ心いできて。やがてをつとかへるといふころ。
毒の酒をつくりて侍けるに。ほどなく夫帰り侍
るに。妻いひけるハ。はる〴〵の旅の疲をなぐさめま
いらせんと思ひ。酒をつくり置侍るなり。いざ〴〵すゝめ
まいらせんとて。めしつかふ下女をよび。其酒もちて
来れといひ付けるに。此下女かねてのミたりがハし
き事をもしり。此毒の酒のたくミをも。よく知た
りければ。此酒を持出てまのあたりに主人を弑〈挿絵〉上部
さん事。我不義も妻の悪逆にことならず。又あらハし
て夫に妻をころさしめんも。いたハしけれバ。いかゞ　一八オ
ハせんと。あんじわづらひて。いでかねけるが。
ふと思ひ出して。どくの酒をもちていづる
とて。わざとつまづきたをれて。酒を皆
こぼしすてければ。主人おほきにいかり　〈挿絵〉下部
むちうちけるに。うたるゝをくるしミて。
もしいひあらハしやせん。つゐでに殺さバやと。
妻もともにこれをうちて。たへいるバかりに
なりけれども。堪忍つよくして。つゐにいひあ
らハさずして。すぎ行けるに。そのゝち夫
のおとゝ。此しさいを聞およびて。夫にかく
としらせければ。夫驚悔て。遂に妻を
殺。さて下女の酒をこぼしたりつる心ざしを
感じ。本妻となさんといひけれども。それハ
礼儀にかなハずとて。同心せず。此事世に
かくれなかりければ。たつとき人々此下女を
あらそい。むかへんとのぞめる人おほ　『八ウ
かりけるとなん
九孟子のわかき御時。ある時おくへいり
給ふに。妻かたをぬぎてゐられたりけれバ。
此ふるまひ孟子の御心に入給ハずして。見　〈挿絵〉下部
つけたまふとひとしく。とつてかへしそれより後
つゐに妻のへやへ入給ハず。妻うたてに思ハれ。孟子
の御母に此よしをことハりて。をやのかたへかへらんと。い
とまを
こハれければ。孟母これをきゝたまひて。いそぎ孟子をよび
いましめたまひけるハ。それ礼の大法に三つのをしへあり。
門にいらんと

する時に。内にたれかゐたまふと。とひて入事ハ。内にゐる
人にあふ心得として。
卒尓不敬のふるまひ。なからんがためなり。堂にのぼらんと
する時に。こハづ
くりしてのぼる事ハ。人をいましめておこたらせまじきため
なり。戸をひらき
てうちへいらんとする時に。むかひのかたをミず。わがあし
もとのミを見ている事ハ。
人のあやまちをミいだすまじきためなり。しかるにいまなん
ぢミづから此礼法をしらず　」九オ
〈挿絵〉　九ウ
して。つまの無礼を見あらハし。うとむこゝろあることかへ
りてなんぢがあやまちまされ
りとせめたまへば。孟子ぜにもと思ひ給ひ。つまをそのまゝ
とゞめおき給ひけるとなん
㊉晋の陶侃が母。いゐまづしくして。つねに。をうミ。はたを
おりて。朝夕をおくりけるが。わが
子の陶侃ををしへいましむることたゞしくして。つねにとも
なふ人も。われにまさりたる人にのミ
ともなハせられける。ある時范逵といへる貴人陶侃をとひ来
て。一宿せられるけるに。おりしも
大雪ふりて。客の馬にまぐさかふべきやうもなかりければ。
みづからしきてふしたるこもを
まくり。これをきりて馬にかひ。もとより家まづしくてある
じまうけすべきふぜいも
ともしければ。ひそかにわが髪をきり。となりの人にうりて。
そのあたひにてさけさかなを
とゝのへ。ちそうをなしけるに。范逵このあらましをきゝ。
おほきにかんじ申されけるハ。貧家
にそだちながら。陶侃が才智すぐれたるこそことハりなれ。
この母にあらずんバ。いかでかこの
子をうみ侍らんやとぞほめられけるが。ほどなく陶侃高位高
官にのぼり。ほまれを
世にあらハしけるとなん
㊉敬姜ハ。公父文伯が母なり。ある時文伯友とつれだち堂へ
のぼるを。母の見られけるに。友
だちの人文伯をうやまひ。文伯が太刀をもち。くつをなをし。
はいかゞミて親や兄などにうや
まひつかゆるがごとくなれば。母これを見て。いそぎ文伯を
よび。せめられけるハ。むかしの聖　」十オ
〈挿絵〉　十ウ
王明君ハ。國土の人ことぐく臣下たれども。われにしたが
ふ人ハわれにゐきなしとて。賢人
あればうやまひたつとミたまひて。臣下のごとくにあひしら

ひ給ハず。つねゞさやうの
賢人にあひ。御身をへりくだりたまハんことをのミ。ねがひ
たまひしに。いまなんぢとし
わかく。くらゐひきく才たかゝらずして。そのまじハれる友
を見れバ。かへりて
みななんぢにしたがふ人々にていやしき人と見えたり。なん
ぢかれらがした
がひうやまふを見てよろこばしくおもひ。わが身をたれる人
とおもハゞ
日々に徳行おとろへて。ゑきなかるべしとて。いかりいさめ
られけれバ。
文伯ことハりに服し。それよりのちハ。われにまさりたる人
にのミ
ともなひ。道をはげミければ。徳行たゞしくなりほまれを。
世に
あらハしけるとなん　〈挿絵〉下部
㊀漢中の李法があね穆姜ハ。程文矩が妻となりて。二人の
子をもてり。又前腹のまゝ子四人あり。程文矩死してのち。
四人のまゝ子。まゝ母をそしりにくむこと。日々にふかしと
いへども。まゝ母すこしも聞いれずして。いよ〳〵まゝ子を
愛しはごくミて。衣類食物にいたるまで。実子に　十一オ
まさりて。よくそだてければ。ある人いひ
けるハ。まゝ母のわが子にまさりて。いつ
くしミたまふをもわきまへず。かく　〈挿絵〉下部
ふ孝なるまゝ子なれば。をひ出し玉へと
いさめければ。まゝはゝこたへ申されけるハ。
此まゝ子どもゝ。もとより天性の生れ
つきハあしからねども。なまごゝろのひが
めるゆへなれば。われ義をつくしてみ
ちびき侍らバ。などか善心にうつらざら
んやとて。慈愛のこゝろます〳〵ふかゝり
ける。かゝりける処に。まゝ子の惣領おもき
やまひをうけ。すでにあやうくくるしむ
事かぎりなし。まゝ母これをかなしミ
あさゆふこまやかにあつかひ。手づから
くすりをあたゝめ。食物をとゝのへ。心を　十一ウ
つくして。あつかひけれは。そのしるしにやほどなく。ほん
ぶくし侍りける。そのとき
まゝ子の惣領三人のおとゝをよびいひけるハ。まゝ母の慈
悲恩愛の御こころざし。いまさら
おもひあたり。ありがたき事かぎりなし。われらつたなき
こゝろにて。としごろふ
孝をなしたてまつりしつミ。のがるべきみちなしとて。四人
あひぐし政所へゆき。まゝ

はゝの恩徳われ〳〵がふ孝のとがをいひたて。つミにあハんとうつたへ申あげければ
世にめづらしきうつたへ。まゝはゝの徳行たぐひまれなる事なりとて。まゝはゝをよび
いだしたまひ。ほうひとして其家の諸役を免許したまひ。さて四人のまゝ子も。とがを
しりてうつたへきたりければ。いまよりのちハさだめて。悪行をあらたむべし。しからば
これもつミすべきにあらずとて。ゆるし返したまへバ。まゝ子もおのづから善人となり
孝行の心ざしふかくなり侍りけるとなん

㊀河南の樂羊子。道をとをりける時。こかねを一つゝみひろい。うれしくおもひもちて
帰りて。妻に見せよろこびけれバ。妻すこしもこれをよろこばずして申ける。こゝ
ろざしあるさふらひハ。いかほどのどかハきても。盗泉の水をのまず。廉潔なる人ハいかほど
うゑたる時も。されくらへといひて。あたゆる食をくらハず
といふ事あり。たとひいゑまつし
くして。あさゆふにせまり侍るとも。みちにかなハざるたか
らをもとむべからず。しかるに
いま大路にてひろいたまへる

〈挿絵〉下部

こがねハ。あたゆる人もなく。う
べきゆへもなく。おとしたる
人ハいかばかりをしくおもふ
べし。これをひろいよろこび
たまふハ。あさましき御こゝろ
ならずやといさめければ。
樂羊子道理に服して。
やがてそのこがねを
もちていで。又野
中へすてゝそ帰り侍りける

㊁樂羊子。がくもんの為。師匠に
つき他國へ行けるが。一年もたゝざる
うちに。古郷へかへりぬ。妻おりしも
はたををりてゐたりけるが。いかにして
はやくかへり給ふと。とひければ。たびの物うさに。古郷を
なつかしくおもひ。ふとかへり
侍るなりとこたへたりけれバ。妻そのまゝ小刀をとりて。を
りかけたるきぬを寸々にきり
て。樂羊子にいひけるハ。此きぬをおるに。一すちのいとを
つも
りて。一寸となり。一寸をかさねて。一尺となり。次第
〳〵におこ

たらざれバつゐに。一丈一疋となりぬわつかの一すぢより
事　〈挿絵〉上部
おこりて。たへずつとむるによりて。其功成就すること
かくのごとくなれば。学文のミちも又これにことなるべ
からず。しかるに御身。功もつミたまハずして半途に
て。おこたり帰り玉ふハ。わがおりかけたるきぬをた
ちすてしにことならずと。いさめければ。樂羊子も
つともとおもひ。それより取て返し。七年まて
古郷へかへらず。学文修行はげミ。つとめければ。つゐに
学業成就し。ほまれを世にあらハし侍るとなん
孟母の孟子をいさめたまひしもこれにことならず。
賢女の心。いづれもひとしきゆへなるべし　〓十三オ
㊀斉の晏子ハかくれなき宰相なり
有時外へいてらるゝに。其馬とり御馬の口
をとり。駟馬にむちうち。さもおもひて
なるかほバせにて。いき〳〵として御供
する有様を。此馬とりのつま。門のひま
よりのぞきみて。わが夫のふるまひ心　〈挿絵〉上部
にかなハずして。其かへるを待て夫に
いひけるハ。さて〳〵其方の身上かくいやし
きことハりなれ。それをいかにと申すに。
さきほど宰相殿の御出を。ほのかにのぞき
見侍るに。三尺にもたりたまハぬ程の小
男にて。御じんぶつよくもましまさず。し
かれども御君天下にかくれなきハ。われ
こそ大國の宰相にて。時を得たるとたか
ぶり玉ふ御けしき。いさゝかもましまさず。　〓十三ウ
たゞ御つゝしみふかく。へりくだりて。物を思案したまふ御
よそほひなり。しかるにその
方のうまれつきハ。たけ高くすゝやかなるしんふつにて。御
馬の口をとり。このきやうがいを
おもひでと思へるさまにて。いき〳〵としたるけしきいとあ
さましきこゝろえなり。たとひ
天命にて貧賤にうまれあひたりとも心ざしをたてゝ。時にあ
ハざるハはつべきことに
あらず。其方のまづしくいやしきさまハ。心よりなしてこれ
をたれりと思ひたまへると
見へ侍れバ。たのむかひなき人なりとて。しきりにいとまを
こひけれバ。をつと此ことハり
を感じ。心ざしをあらためすぎにしかたのふるまひと。大き
にかハりたる有様なり
ければ。さすがの晏子なれば。にハかにつねとかハりたるよ
そほひを。あやしく思はれ
馬とりをよび。とハれけるに妻のいさめし事。ありのまゝに

申あげゝれバ。晏子申され
けるハ。妻のいさめしことばゝ。たぐひなき金言なれバ称美
するにあまりあり。さて
なんぢも又悪人にハあらざるべし。人ごとにたれもあやまち
ハある物なり。いさめをきゝ
うけて。すみやかにあやまちをあらたむる事きどくなれば。
二人ともに凡人にあらず
とて。夫婦のことつぶさに。斉の君へ申あげられければ。妻
ハ命婦の号を下されてほ
うびしたまひ。をつとハ大夫の官になし給ひ侍りけるとなん
㊀魯の黔婁死したる時。曾子とふらひに行玉へり。黔婁もとよ
り家まづしかりけ
れバ。しがひの上におほいたる布ぶすまさへみじ
かくして。かしらをおほへバ。手あしいで。手足を
おほへばかしらあらハれぬ。曾子見かね給ひて。
黔婁がつまにおほせけるハ。此ふすまをすミち〈挿絵〉上部
がへにゆがめてきせ侍らバ。かしらも手足もお
ほハれ侍りなん。きせなをされよかしとのた
まひければ。妻こたへて申けるハ。わがをつとの
一生たゞしきことをこのミて。かりにもゆが
ミなゝめなる事をきらへり。死してのちわ
れこのふすまをゆがめてきせ侍らハ。をつと

「十四オ

のこゝろざしにたがひ侍るものなり。ゆがめて
あまりあらんよりハ。たゞしくしてたら
ざるハ。はるかにまさり侍るとて。つゐにきせなほさゞりけ
れば。曾子ふかくかんじ
たまひて。つまのことばにて。夫のとくをもをしはかり給ひ
けるとなん
㊁京師の節女がをつとハ。かたきをもてる人なり。かたき此を
闘ことを
ねらひけれども。しのび入べきたよりなくして
ひさしく。本意をとげざるところに。ある人
申けるハかたきの妻ハたぐひなき。をやに孝
行なる人なれバ。此親にいはせたらバ。妻同心
してひきいれみちびきなんといひければ。
かたきこれをきゝ。かの妻のちゝをとらへいひけるハ。
その方のむすめ内通ををして。をつとの
ねどころしらせミちびき侍らバ。御身の〈挿絵〉下部
いのちをたすくべし。さも侍らぬ物ならば。
その方のいのちをたすくまじとせめけれバ。
ちからなくむすめをよびよせ。かくとつげ
けれバ。むすめ心に思ひけるハ。父のおほせに
したがへば。おつとをころす不義のつミのがれ
がたく又おつとをたすけんとすれば。父を

「十四ウ

ころさせん事も不孝のとがおもければ。
不義不孝ひとつもありてハ。わがいのちい
きてもせんなし。しからバたゞわがいのちを
すてんより外はなしと思ひきり。ちゝと
かたきとにむかひて。いつハり同心して
いひけるハ。あすの夜そこのところにあらた
にかみをあらひ。東まくらにふしてゐる
人わがをつとなり。われつまどをあけて　〈挿絵〉上部
おき侍るべし。これをうちたまへとやく
そくし。それよりをつとの家にかへり。をつと
をばことゞころにふさしめ。ミづからかミを
あらひ。つま戸をあけそこの所に。ひがし
まくらにふしてぞ侍ける。あんのごとく夜半
時分にかたきしのびいり。なんなくくびを
とり。本望をとげたると思ひよろこびいで
けるが。夜あけてこれをミれバ。こゝろざし　」十五ウ
たるかたきのくびにハあらで。かのつまのくびなり。かたき
もさすがいは木にあら
ざれば。つまの孝義をたてゝ。いのちをすてし心ざしをかん
じあハれミ。それ
よりのち。ねたミの心もうちとけて。そのをつとをもうたざ
りけるとなん

」十五オ

㊇秦の苑杞梁が妻。孟姜ハよめいりして三日めに。をつと長
城といふ所
へ軍役に行て。久しくかへらず。やう〳〵夜さむのころにな
りぬれば。
冬の衣るいなどしたゝめおくりつかハしけるに。ほどなくた
より有て。
いつのころいつの日。をつとうせたまひぬとつげきたれば。
天によバひ
てなきかなしミ。せめてなきからをだにたづねもとめて。
ミづからはふむらんとて。はる〴〵と
長城といふところにたどり行。こゝ
かしことたづねミるに。おほくの　〈挿絵〉上部・下部
かばね山野にミちて。いづれわが
をつとの骸骨としれざりければ。かなしく
おもひてみつからゆびをかミて。血をいだし。
おほくの骨にしたで。わがをつとのほねならバ。　」十六オ
したてたる血しミつきてのごふとも
はげざれとちかひければ。あまたの
骨の中にあんのごとくかゝりたる血。
いくたびはらへどもしミつきて。
はげざる骨有ければ。此ほね共を　〈挿絵〉下部
ひろいあつめ。くびにかけて。古郷へ

かへりけるに。潼関といふ所にいたりて。
身つかれちからつきてわづらひ。つゐに
むなしく、成にけり。所の人々あハれにおもひ。
しがひをとりをき。するの世の女のをつとを思ふ
かゞみとせんとて。そのすがたを木像につくり。
やしろにこめ。あがめおき侍りけるとなん
㊀十九劉曜ハ。梁緯といふひとをころし。其妻容顔
美麗なりければ。とりものにして。わがつまとなさんと
しけるに。梁緯がつまさらに同心せずしていひけるは。」十六ウ
むかしより。忠臣二君につかへず。貞女両夫にまみへずと
うけたまハり侍れバ。
おつと死したりとて。いかでかふたゝび。他のをつとにまみ
え侍らんや。われ
もし此節義をまもらずして。御身にしたがひ侍る心ならバ。
又他のをつといざなひ
侍るとも。それにもしたがひ侍るべし。かくたれにもなびき
やすき。ふ義なるこゝろ
ならバ。御身の妻となしたまひても。せん
なき事ならずや。ねがはくハさきだちし
をつとゝ。おなじみちになしてたび給へ
かしと。道理につめてなきくどき　〈挿絵〉上部
ければ。劉曜も貞女のこゝろざしを

かんじゆるしおきけるに。ほとなくつゐに。
じがひして死に侍りけるとなん
㊁王氏が妻ハ。臨川といふ所の人なり。よ
めいりして一年もたゝざる内に。天下乱れ。
えびすの國よりせめいりければ。さる時
王氏がつま。をつとにいひけるハ。かく天下　」十七オ
さハがしけれバ。何時乱妨狼藉にあひ侍らん事もはかりがた
し。われもしとりものに
せられ。いづ方へ行侍るとも。ふたゝび他のをつとにまみえ
侍るまじ。御身いづかたにながらへ
ましますとも。ことつまをむかへたまハゞ。わがゐはいの前
に向ひことハり玉ふべし。さも侍らぬもの
ならバ。うらみ奉らんと。ちかひければ。をつともその心ざ
しをかんじ。たがひにいひかハしをき侍る
が。あんのごとく。えびす其所へミだれ入て。夫婦ともにと
り物とし。大将千戸といふもの王氏
が妻を見て。ひそかによびよせわがつまとなさんといひける
に。さま〳〵ことハりをいひてじ
たいしけれども。聞いるゝけしきなく。しきりにせめければ。
せんかたなくて王氏がつまたバ
かりいひけるハ。とてもかゝる身となりたるうへハ。じたひ
申すとものがれ侍るまじ。此上ハとも

かくも御はからひにしたがひ侍るべし。さりながら今わが夫
とまぢかくこの所にあり
ながら。他のをつとにしたしミまいらせん事。夫婦の中をつ
との心ねもはづかしけれバ。
とかくわがをつとをば。ゆるし給ひて。いづ方へもおちゆか
せ。其後はおほせにしたがひ
侍らんといひければ。千戸さも有べきことゝ思ひ。そのをつ
とにハおほくのこがねきぬなどを
おくり。道すがらの用心にとて。弓矢まであたへてゆるし返
し侍りぬ。さて一日路も行すぐ
べきと思ふ折ふし。約束のごとく王氏がつまにちかづき侍れ
バ。妻さきのやくそくにたがひ。中
中同心のけしきなくて。いひけるハ。さきにあざむきいひし
ハ。をつとのいのちを。たすけんはかり　『十七ウ

〈挿絵〉　十八オ

ことなり。われふたゝび他のをつとにまみえざる心ざしハ。
天地神明にちかひ侍れバ。いのちを
すつることつゆばかりもおしからず。いかやうにも心のまゝ
にはからひたまへといひはなちけれバ。
千戸大きにいかり。つゐに王氏が妻をころし侍りける。さて
王氏ハつゝがなくて。古郷へかへり
有けるが。いまだ子をもたざる事をなげき。ことつまをむか
へんと思ひ。あなたこなたと
数年のあひだきもいりけれども。つゐにとゝのハず。さると
きかのふるき妻と。いひかハせし事を
思ひいだし。妻のゐはいにむかひ此よしつぶさにいひければ。
其夜の夢にふるきつま枕がミに
たちいひけるハ。われ仇にころされ死して後。いづれの所の
なにがしといふ人のむすめと生れて。
いま十さいになり侍りぬ。七年過て後御身の方へゆき。ふ
たゝび夫婦と成侍るべし。心をつくし
てこと妻をもとめ給ふ共。とゝのハざるはづなりと。あり
〳〵とつげられば。王氏きたいふしぎの
思ひをなし。明る日にいたり。いそぎ其所のなにがしをたづ
ねとひければ。夢のつげつゆも
たがハす。むすめ十歳になり其むすめのうまれしとしと月日。
かの妻の死せし時刻を人
のかたりしに。すこしもたがハざりければ。王氏すなハちか
くといひいれけるに。すミやかに事
とゝのをりて。七年すぎてむかへとり。二たび夫婦となり侍
りけるとなん　『十八ウ

明孝慈列女図會巻之下終